第３８回スポーツリレートーク
「選手からパキスタン代表監督へ　～　仙台を拠点に野球を世界に」
講師　パキスタン野球代表監督　　色川　冬馬　氏
２０１６年2月２５日（木）　１８時半　～　２０時半
仙台市生涯学習支援センター　会議室
参加者　１８名　　会員１５名　一般３名

＜はじめに＞
　初めまして色川冬馬といいます。現在２６歳です。今は中学生くらいでアメリカ文化に触れる事も多いと思いますが、私は１９歳で初めてアメリカにわたりました。高校時代は聖和学園で、監督がタイで野球を広めていた方でした。常々「野球には無限の可能性がある」ということをその方から教えられ、当時はタイに遠征し、韓国やタイの代表と対戦したりしていました。実はアルバイトをして大学を卒業したらアメリカに行こうとしていましたが、１９歳の時にアメリカにわたりトライアウトを受けました。選手としてアメリカでの実績は３年半ほどでした。

野球はこれからどう進んでいけばいいのか、世界ランキングではやっと日本が１位ですが、私はイラン代表やパキスタン代表の監督になって感じるのは、日本の野球人口は約７００万人、世界では約３，５００万人ということで、アジアの中ではまだまだ知っている人が少ないということです。

＜挑戦の歩み＞
　私の世界への挑戦は２００９年のアメリカでのトライアウトから始まりましたが、その初日に肉ばなれを起こすという結果で、その後初めて友人として、ドルの使い方をはじめいろいろなことを教えてくれたジョーンズという友人には、日本のお金をみせてくれと言われて当時の私にとっては大金だった一万円を貸したら、そのままいなくなってしまい、打ちのめされて日本に帰ってくることになりました。笑われることも多くありましたが、

それでもやり通すと誓い、２０１０年も挑戦しダメで、２０１１年にやっと独立リーグのチームに契約してもらい２０１３年までアメリカを転々としました。

２０１３年、カリブのプエルトリコの球団のオーナーから声をかけてもらい、本拠地をもたないトラベリングチームでプレーもしました。そこで感じたのは、その国の文化を現地に行って知ることが大切だということでした。

２０１４年にイランから声がかかって行ったところ、代表の監督ということだったのですが、チームも何もなく、毎日チラシを配ったり、各都市をまわっていろいろと聞いたりしていましたが、そのうちにイラン野球連盟も関心を持ってくれ、正式に代表監督になることができました。イランは恋愛も表立っては禁止でたとえ付き合っていても外で手をつないだりはできません、お酒も豚肉も宗教上の理由で禁止の国です。半ズボンもまわりに注意されました。さらにインターネットも規制がありました。周りからは危険だからと随分心配されましたが、実はアメリカが銃社会でいつ身に危険が及ぶかわからないのに対し、イランは銃は規制されていてとても平和でした。また、当時は外国人も少なくとても珍しがられました。私がいたころの流行は鼻の整形で男も女も随分やっている人がいました。

２０１５年にパキスタンから代表監督の話しがきました。イランは球場を持っているのですが、パキスタンは球場すらありません。それでも目標はアジア選手権で５位以内に入る事でした。アジアでは、日本・韓国・台湾、そして中国が４強で、バキスタンは６～７位くらいで、パキスタンの野球連盟はアジア野球連盟の支援を受けている状態でした。
私に監督の話しがきたのは、イランと同じイスラム教の国であり、宗教的なことを理解しているからということでした。

＜パキスタン代表監督として＞

バキスタンでの代表の合宿はつらいものでした。気温は４０度にもなる中、水も十分に供給されませんでした。合宿所はなんとロッカールームで、衛生面でも苦しい状況でした。僕は「ピンチはチャンス」という言葉が大好きですが、厳しい中でパキスタンの国民的スポーツであるクリケットの試合を観戦したところ、野球の代表選手の投げたり、打ったりの癖がクリケットからきていることがわかったりしました。

代表合宿の後半は疲れもピークで、けが人も増え、そうした不満や不安の標的は外国人である僕に向けられ、表面的にはリスペクトしてくれていますが、大変難しい状況でした。

ここでも「ピンチはチャンス」、僕は行き違いの原因を明確にするために、キーマンに確認をしてから、選手達とミーティングをしました。そこで話したのは、何故自分が代表監督を引き受けたのか、ということです。それはパキスタンの選手個々の能力が高いことだと話し、彼らの怒りの対象は外にあるということ、しっかりやればこれだけの可能性があり野球で生計がたてられると伝えました。　海外に出て思うことは、「協力は自然には発生しない」ということです。

アジア大会に代表監督として参加したところ、いつのまにか知らないパキスタン人が帯同していたり、根本的な問題としてユニフォームがなかったり、ヘルメットの色がカラフルでバラバラだったり、そのほとんど全ての解決を自分がやらなければなりませんでした。なんとかクリアーして大会に参加、インドネシアに勝ち５位が確定しました。パキスタン野球連盟の会長は６６歳で、自分が生きている間に世界大会に出場したいといっていました。この会長との信頼関係だけでやってこられた気がします。個人的には中国をパキスタンがやぶってみたかったところです。今後９月にアメリカでＷＢＣの予選があります。

今回の経験を通じていろいろと感じたことがありました。僕がいた国に５年後、１０年後に価値のあるものを残すことは、選手達が指導者になっていくことだと思います。

＜ラテンアメリカ野球選手権大会＞

ラテンアメリカ野球選手権大会は１３歳以下の子どもたちのための中南米の大会です。その大会に被災地の子どもたちを野球で応援したいと招待されました。何故、この大会なのかというと、ビーチの前に選手村があり魅力的だったこと、そこに参加チームの子どもたちが入るということで、安全面の環境も素晴らしく、パレードや多彩な交流のプログラムがあったからです。

選手は県協会などの協力を得てトライアウトを実施しましたが、技術だけではなく面接などでメンタルの部分も確認しました。選出された子どもたちには英語や危機管理などの研修も行いアスリートとして必要なものを学んでもらい、そしてディスカッションもやりました。日本の子どもたちは主体性や自主性が欠けていると思って、いろいろな刺激を与えてきました。

チームについてはいろんな方が応援してくれました。現地での滞在費用は向こうが負担してくれますが、そこまでの渡航費用は出なかったので６００万円を県内の企業に支援していただきました。言葉は通じないがそこにいけばコミュニケーションが生まれます。滞在中は他の国がやらないことをやろう、ということで毎朝ごみ拾いをやりました、最初は不思議がられましたが、だんだんに他の国の子どもたちも参加してくれるようになりました。

＜これからの目標＞

時間が無くなりました。僕のこれからの目標はスペイン語を覚えて、中南米の国に挑戦したいということ、次に自分のこれまでを自費出版したいと思って準備しています。また、２０１８年にはＵ－１５年代のワールドシリーズをこの仙台で開催したいと思っています。ぜひ、皆様にも協力いただければと思っています。本日はありがとうございました。

文責　　泉田　和雄